

随筆

中之島今昔

—難波橋を中心に—

近藤和夫*

1. はじめに

往時、中之島は日本銀行大阪支店の辺りにあった一条の堀割で、東は中之島町、西は肥後島町と区画されていた。今も、ほぼこの辺りを境にして、中之島東地区・西地区と称されている。今年に入り、期せずして、両地区共に一つの転機を迎えることになった。西地区では、明治13年に、府立大阪医学校として開学の大阪大学医学部跡地における、中之島芸能センターの設立構想であり、東地区では、いうまでもなく市庁舎の建替計画である。

大阪ルネッサンスとも表現されている前者は、また、中之島西地区の形態を大きく変えようとするものでもある。幕末までは、諸藩蔵屋敷の存在がすべての機能であり、維新後も先ず役所・学校からこの地に施設を求め、次いで大企業の進出となった。特に西地区は、昭和に入ってから、^①「月給取」が一種特別な階級とみられていた頃は、庶民に縁のない地であり、現

在でも一流サラリーマンの働く処で憩いの場ではない。これから大阪の文芸の中心となれば、開市以来400年にして、初めて市民共有の中之島西地区をみる事が期待できる。

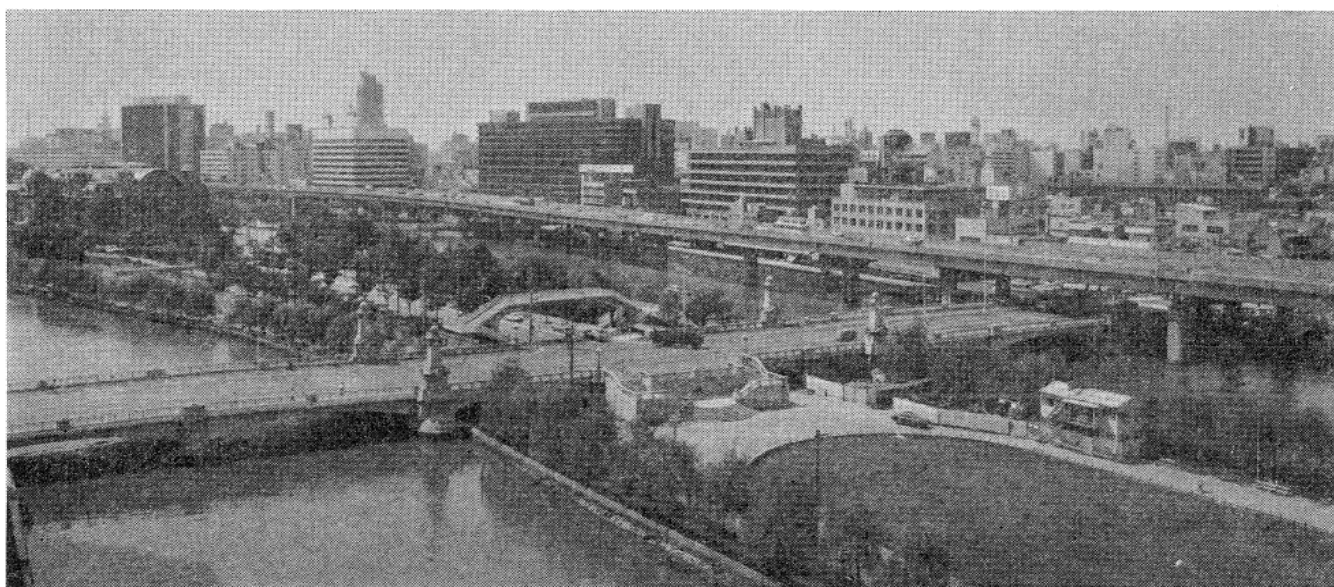
これに反し、中之島東地区は、古くは大川の納涼があり、近くは水と緑と建物の調和した最も大阪らしい都市空間として親しまれている。それだけに、市庁舎建替による現状変更は、市民に多くの話題を提供した。

これを機会に、難波橋を中心にして、中之島の変遷を振り返ってみる。

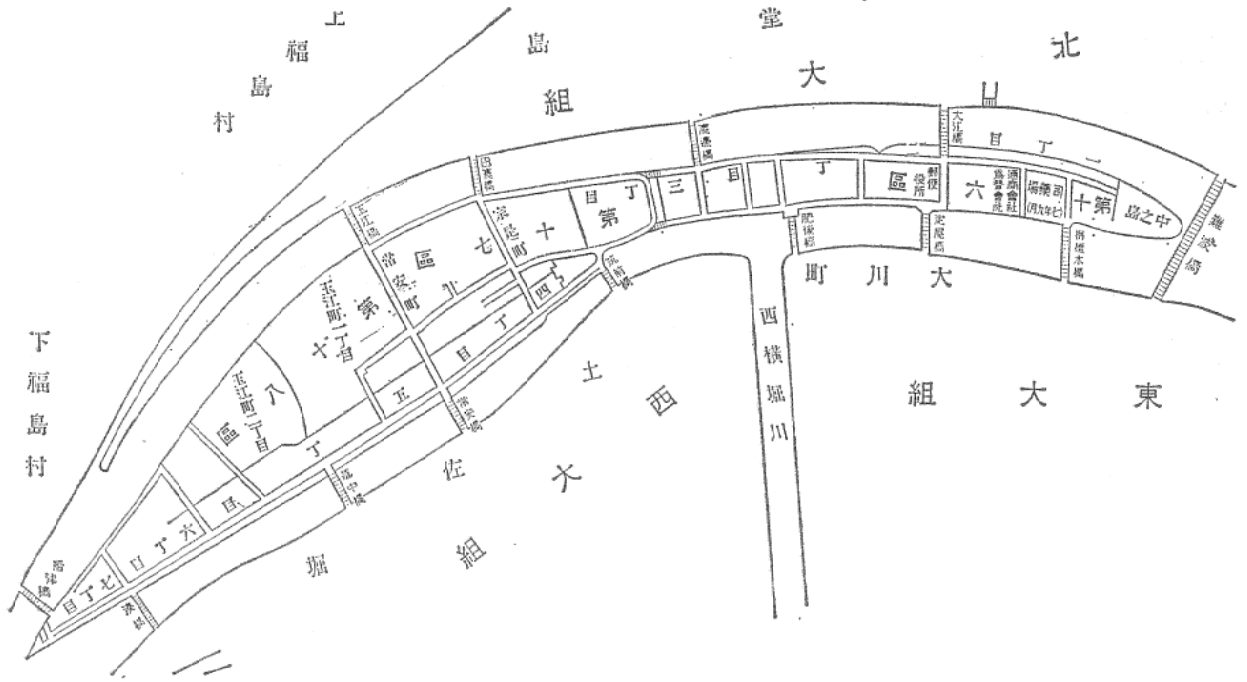
以下の参考に、明治5年・同33年・昭和11年の中之島平面図を図一1に示す。同図(a)(c)は昭和12年に中之島尋常小学校65周年記念会より刊行の「中之島誌」附録から、(b)は明治33年に大阪市より発行の地図からコピーしたものである。

2. 明治時代までの大川と難波橋

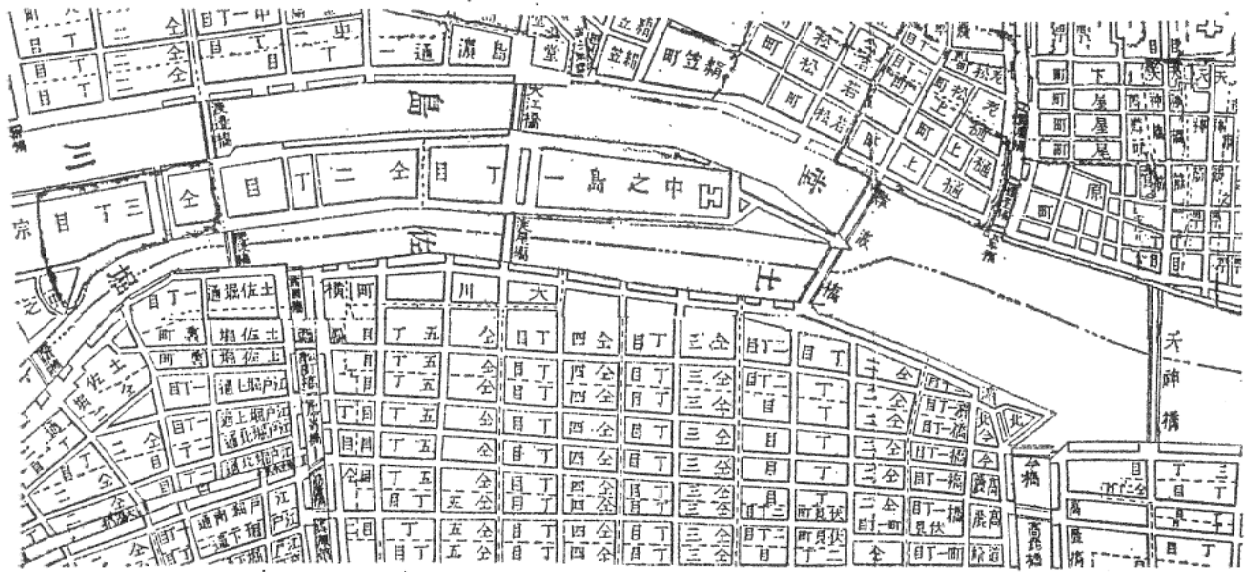
江戸から明治時代にかけて、大川の納涼が、



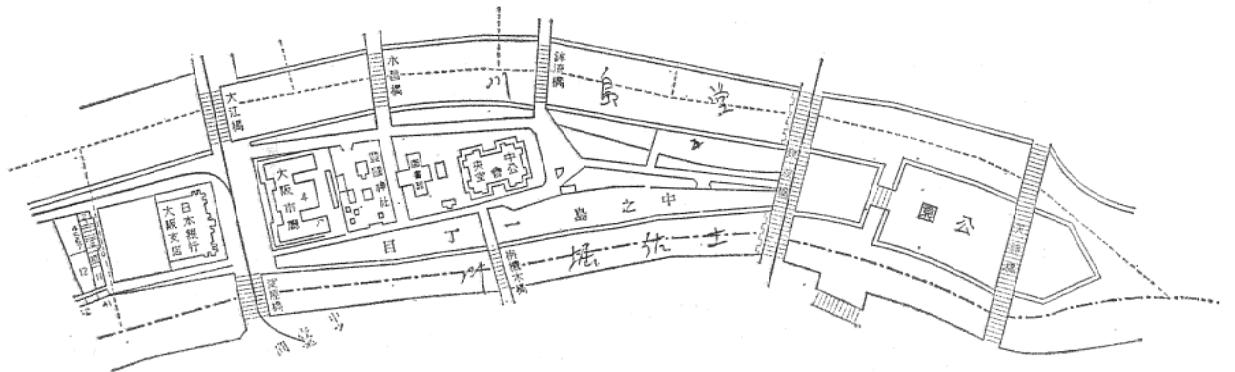
* 近藤和夫 (Kazuo KONDO), 大阪市助役, 工学博士, 土木工学



(a) 明治 5 年



(b) 明治 33 年



(c) 昭和 11 年

図-1 中之島平面図

如何に大阪の風物であり、代表するものであったかは、『西鶴』、『近松』の昔から、文筆によく知られるところである。重複を避け、幕末に大阪在住の学者藤沢泊園の撰による、17人181首を収めた『浪華四時雑詞』から、数首抜萃するに止める。

中島晚眺

幕匠船窓大鼓鳴 百夫揺櫓溯江行
方知西國諸侯至 倉邸門開列炬明

広瀬旭莊

河橋納涼

浪速城中一百橋 橋々連榻賞涼宵
誰知燈影旋踈處 明月清風別様饒

橋本晚翠

泛船游三大橋

薄靄模糊暗暹嬌 淡雲孕月正揺々
扁舟来繁何邊是 三大橋中最大橋

竹鼻纜山

浪華橋納涼

浪華橋下浪生風 坐榻倚欄涼不空
舟舶向京如矢疾 月懸弓影古城東

早野思齋

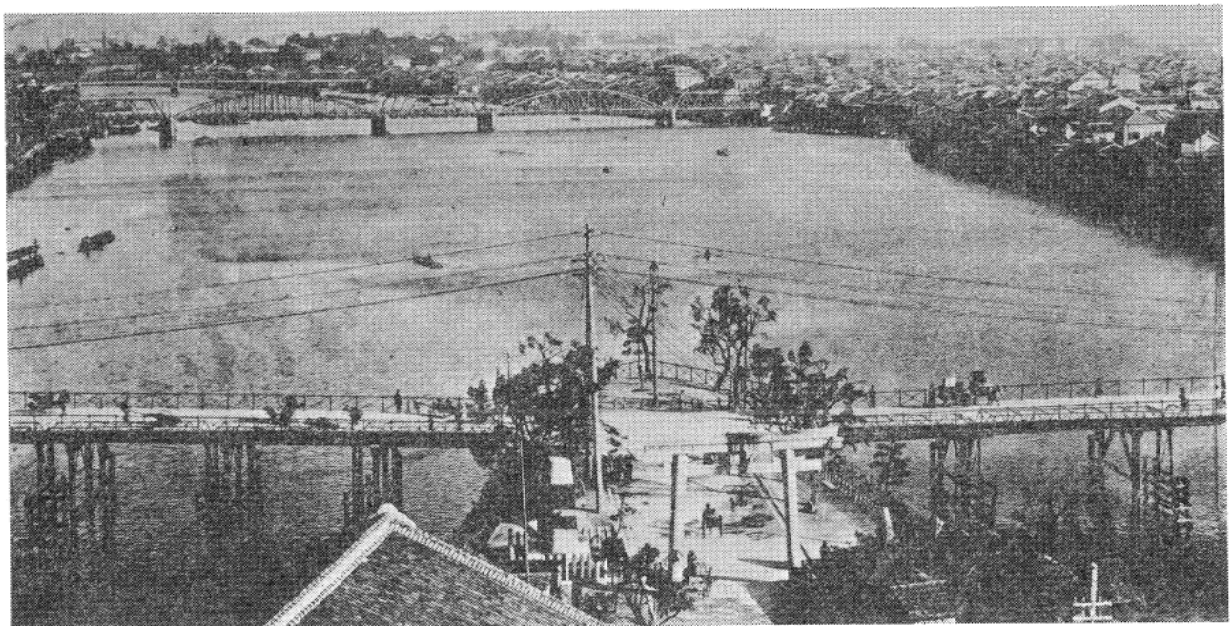
さて、写真一は明治時代の難波橋である。後方に、当時最大の215フィートスパンを有する天神橋のトラスが写っているから、明治21年以降の写真であることは間違いない。天眼鏡を用いると、さらに後方に、天満橋のホイップル

トラスが幽かに見える。ところが、このIビームあるいはプレートガーダーの難波橋が何時完成したかとなると、諸説紛々としかしいようがない。堂島・土佐堀の両川部を合せて長さ114間・幅4.4間は大体間違いなさそうだが、完成時期については、市史・府史・明治工業史の記述が一致しない。また、図一(b)及び写真一のように、中之島剣先が難波橋の所まで延ばされたのは、市史では明治9年となっている。同じく図一(b)では、当時の橋は堺筋より一筋西、いわゆる難波橋筋に架かっていたことが判る。ともあれ、この写真は、『澱江』と江の字を付せられる川の規模と共に、現在の我々には何処か野暮ったい感を抱かせる。

3. 大正時代の中の島と難波橋の築造

明治43年の末に、中之島に沿った堂島・土佐堀の両河岸を埋立て、さらに、剣先を上流へ延ばす案が市会で可決された。関係当局による埋立ての後、中之島公園の拡張整備に着手したのは大正4年からで、大正の終りには、水上公園と呼ばれた近代的公園が出来上っている。現在、話題となっている市庁舎は、大正10年の落成であるから、この点、今の中之島公園と同じ時期に生れたといえよう。しかし、それ以上に、公園の一部として誕生したと目されるのが、ライオン橋こと難波橋であろう。

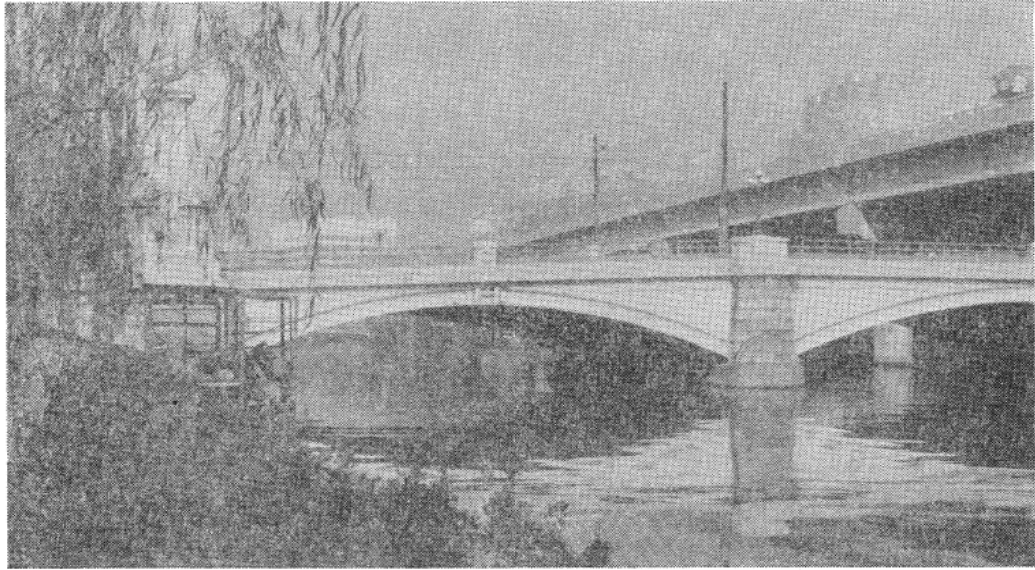
大正4年完成の難波橋は、市史を含め、市電



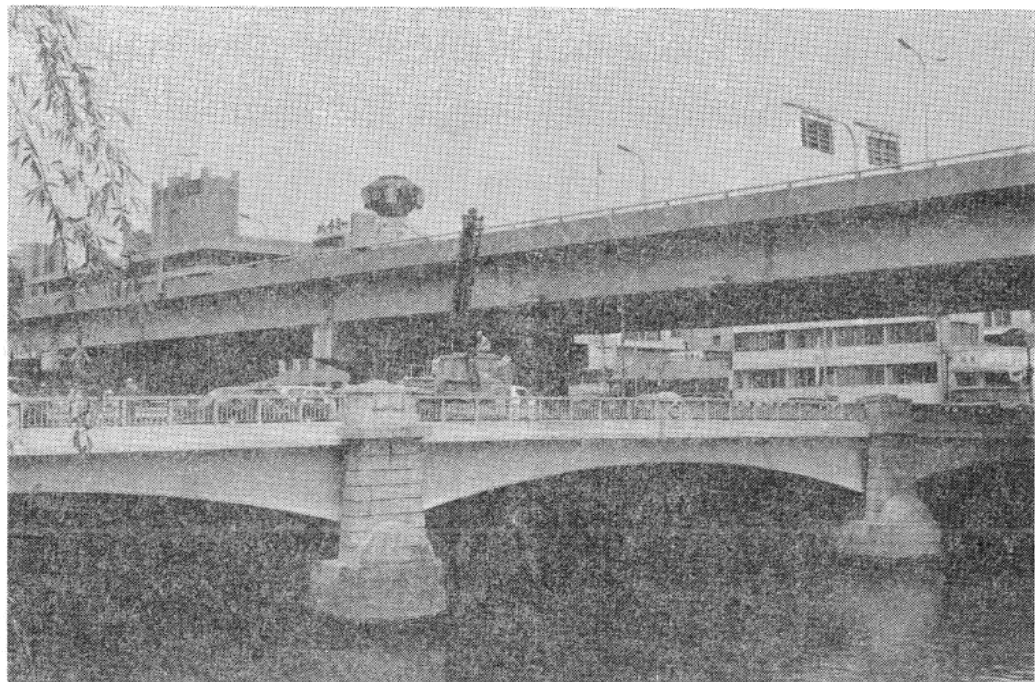
写真一 難波橋（明治時代）

の開通に伴い今の位置すなわち一筋東へ架換えられたとしている。確かに、市電を通すことは架換への一つの要因には違いない。しかし、これだけでは、彼の橋の設計のすべてを説明することはできない。堂島・土佐堀の両川部には軽快な鋼アーチを、中之島部には重厚な石張りの鉄筋コンクリートアーチを配し、市章を組込んだデコラティブな高欄と橋上燈、四隅の親柱上に在るライオン像の装飾、加えて、公園へ降り

る大階段等、かって、私はこれらをすべて近代橋梁への芽生えの一言で片付けてきた。それは間違いのない事実であり、重要なことでもある。しかし、橋梁技術者であるばかりに、橋にのみ目を奪われ、位置する公園との関連が配慮できなかった私の視界を恥じねばならない。明治末に公園を拡げることを決め、埋立てを待って、大正4年から整備を始めているのである。当初は、埋立費用を市で負担することまで考え



(a) 昭和47年以前



(b) 昭和50年以降

写真一2 難波橋

て、公園計画を立案したという。橋の事業費は別途であったかも知れない。しかし、雄大にして意気軒昂な大公園計画の一環として、前記難波橋のデザインをみるときにのみ、すべての点で納得できるものである。

話を戻して、公園計画決定に際し、市会の状況は如何であったろうか。莫大な支出・事業必要の緩急面において反対意見は当然あるとして、別に、水都景観上、人工美で自然美を破壊するとは怪しからぬとの論が出ている。写真—1のような雰囲気の中におったこの人には、20年後の都市の様子が全く想像できなかつたらしい。仕上がった姿がわからないのであるから、案外多くの人々が同じような感をもったかも知れず、かえって、漸新な計画を立案・可決した市当局と市会を賞すべきであろう。然らば、完成の暁には如何であったろうか。やはり、愛着深い現状の変更を喜ばない人は、何時の世にも絶えることがない。今の雑誌『大阪人』の前身である『大大阪』第4巻第8号（昭和3年）に「難波橋は堺筋に移り、川中は埋立てられて水上公園が出来……中略……川のさびれ方、今昔の感に打たれざるを得ない。」「開けゆく文明の歩みに、私どものなつかしい少年の頃の夏の情趣は悉く滅ぼされた、……中略……可惜文明の土工怨めしと、夏だけは水上公園を壊したくなる。」とある。私も古い情趣は惜しむものであるが、堺筋に移った難波橋は最も大阪にふさわしいと思われ、50年後の今日、中之島水上公

園はない方がよいと思う人はおらないであろう。永いようで短く、短いようで永い人の世の半世紀である。

3. 現在の難波橋

写真—2(a)は昭和47年以前の難波橋で、同(b)は同50年以降の同橋である。鉄材供出による戦時標準型高欄が原設計に復元された他に、橋としての基本的な違いがお判りであろうか。橋梁技術者以外には無理であろう。川中部の鋼2ヒンジアーチが Non-P.S. の連続合成桁になっているのである。大正4年架設の鋼アーチが傷んで使用に耐えなくなったので、この部分を架換えた結果である。橋梁技術者からみれば、これも一応難波橋の今昔となる。幸なことに、橋台、橋脚、石張アーチ部等は使える状態であったので、これらはそのまま再使用されている。半世紀有余を風雨に晒され、古めかしくなった橋を直ちに醜い橋と感じる人ならば、これを機会に近代的な設計の橋梁へ架換えを計るであろう。しかし、私は、古くても風格があり、主要部ながら取換えれば十分使えるこの橋には、昔の姿をそのまま残す設計こそ、最も大事なことと考えた。今後さらに幾多の星霜を経て、この橋もいよいよ使用に耐えなくなったその時には、陳腐化した橋に執着することなく、その時代にふさわしく、かつ、往時のメモリーを残す最新の橋に架換えることこそ、大正の始めに、近代公園を立案実施した先人に報いる道であろう。